

リス人のことを敬意をもつてはなす」のに対し、イギリス人は「フランス人に対して」一般に、憎しみと軽蔑」を感じる。フランス人のイギリス人に対する警戒心は、この憎悪を前にした際の「懸念」からくる。「相手を、圧倒し、よう、さもなくば敵を破滅させようともくろむ」イギリス人から、フランス人は「単に身を守りたいだけなのだ」⁽⁹³⁾。

カントがフランスとイギリスを比較すると、イギリス国民には手厳しく、フランスにはその軽さや「熱狂」しやすさをわずかに咎めるくらいで、かれらを大々的に持ち上げがちのようだ。一見、カントは親フランス派のようである。だが、習俗、マナー、道徳性の関係性のかれの解釈にしたがうなら、かれがフランスばかりに加担するのは、たとえばモンテスキューがしたようにフランスの「礼節」とイギリスの「謹厳実直さ」を対比させるべき理由などないと考えるからである。礼節は人間愛と世界市民への素質が芽生える一助となる一方で、たとえば他国を征服する代わりに商業関係の締結が法の進歩に貢献するとしても、「一般的に、商人気質は貴族気質と同様にそもそも人付き合いが悪い」。モンテス

(98) *Ibid.*, p. 298-299.

(99) *Ibid.*, p. 299.

(100) *Ibid.*, p. 300.

(101) *Ibid.*, p. 296.

(102) *Ibid.*, p. 300.

(103) *Ibid.*, p. 301.